

LINEの“功罪”を考える

過去、ネットいじめといえは、

になってしまった。

「掲示板」や「学校裏サイト」が主流であったから、検索により情報を能動的に収集できた。ところが、今では秘密通信が基本のLINEやTwitterが主流になってきており、これらは外部から内容を見ることはできないのでやっかいである。

ある中学校2年生の女子生徒は、クラスメイトとLINEでグループトークをするのが日課であった。彼女は母親同士も含めた話し合いで、LINEを使うにあたってのルールを決めていた。

この日も帰宅から彼女らはLINEでグループトークをしていたが、突然、グループの一人が、「ウザい！」と打った。続けて、もう一人が「○○、ウザい」と打った。その後も誹謗中傷が続き、学校で顔合わせたくないから来るなどと続いた。彼女は親にも相談できずふさぎ込み、翌日から学校を休むよう

ではないかとも受け止められてしまう。

一方で、LINEというツールがあったからこそ発生したいじめも一定数存在する。子どもたちは相手が見えないのをいいことに、裏でグループをつくって好き勝手な誹謗中傷を繰り返すのだ。こうした裏グループの存在に、本人が気付いてしまった時の衝撃は想像に難くない。

LINE社ではこうした状況を背景に、CSR活動として出張講座やワークショップといった、子どもや教師に対するリテラシー教育を実施している。これは、企業の在り方としては評価でき、一定の効果はあると思う。しかし、同社の現状の対策だけでは、私としては不満足である。悪意をもって行われるいじめへの対策がないからだ。経営判断上、難しいのかもしれないが、フィルタリングや緊急通報機能などをもたせることができれば、悪質なケースは減少するのではないだろうか。

同社では、青少年を対象とした10万人規模の大規模なアンケートを実施するようである。その結果を生かして、LINE社がどのような取り組みを進めていくのか、注目している。

▽NPO法人ユース・ガーディアン探偵業のノウハウを生かし、客観的ないじめの実態を調査、レポートを作成するなどして数多くのいじめ問題の解決に寄与している。URL

探偵がみた 学校といじめ

NPO法人ユース・
ガーディアン代表理事

阿部 泰尚

第4回

理由を話さない彼女に業を煮やした母親から私は相談を受け、対策にあたった。このケースでは、LINEのグループトークの発覚を恐れ、加害生徒はトークを消していた。私は、残されたトークの内容から推理し、加害生徒を特定した。その後、母親に連れられた加害生徒が謝罪をしにきて全容が分かったのだが、当初の「ウザい！」は、彼女へのコメントではなく、勉強をすることや学校生活などを含めてという意味であった。ところが、他の子が彼女を指名したことで、悪さけが始まり、そのうち中傷に発展した。それを続けるうちに、段々と本気になっていったということであった。

http://jime-sos.com/